

「死生学の諸問題」

参加自由

担当:清水哲郎、山崎浩司(東京大学大学院人文社会系研究科上廣死生学講座)

曜日・時限:木・5-6

場所:215教室(東京大学本郷キャンパス法文1号館)

概要:死生学の諸問題に関して、参加者の自発的な研究発表とそれに基づく討議を行う。参加者は各自関心を持つテーマを選んで、発表を目指して調査・研究を進めることが望ましい。テーマとしては、臨床死生学および臨床倫理学の諸問題が中心となると予想されるが、これに限定されるわけではなく、参加者の自由な発想を期待する。通年で計10回開催予定。開催日は、同じく木・5-6時限目に行われる応用倫理研究3「『生命と価値』論のフロンティア」と重ならないように調整する。従って本演習・研究会の参加者には、応用倫理研究3にも参加することをお奨めする。具体的授業計画(発表者、テーマ、日時等)は、上廣死生学講座ホームページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/index-j.html>)や山崎の個人ホームページに掲載する(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yamazaki/index.html>)。

予定:(以下、発表タイトルは仮題を含む)

04月16日 第1回 山崎浩司 HIV感染リスクと生きづらさ

—MSM(Men who have Sex with Men)調査から見えてくるもの

(04月23日 応用倫理研究3 竹内整一 「おのずから」と「みずから」のあい)

(05月21日 応用倫理研究3 猪瀬直樹 東京都庁から見た日本)

05月28日 第2回 圓増文 「適切な治療」と「よい治療」との関係をめぐる

—医学的適応概念の考察を通じて

06月11日 第3回 向後裕美子 「在宅ターミナルケアとその基盤としての死観・死の過程観」

(06月18日 応用倫理研究3 保坂和志 世界を肯定する思想—小説という方法から)

06月25日 第4回 賀陽濟 「北米先住民(スーク族)の死生観とその現代的意味」

(法文1号館113教室) Gordon Planes (Chief) & Shirley Alphonse (Healer) 「死生を語る」

(07月02日 応用倫理研究3 川本隆史 「普遍的な価値理念」と「いのちへの遠慮」)

07月09日 第5回 戸田聡一郎 「意識障害患者における痛み刺激実験の現状と展望」

(10月08日 応用倫理研究3 中川恵一 がんと死生観)

10月15日 第6回 白神妙子 「治療内容決定の場面に倫理的応用を試みた臨床看護師

からの一報告」

11月05日 第7回 林千章 「出生前診断をめぐる日本の女性運動と障害者運動の

“対立”を解きほぐすために」

(11月19日 応用倫理研究3 清水哲郎 再論:死に直面した状況において希望はどこにあるのか)

(12月10日 応用倫理研究3 石原孝二 リスクと価値)

12月17日 第8回 橋本望 「家族の自死を悼む心—自死遺族の語りから」

01月21日 第9回 吉沢文武 「生きる意味と死の関係

—死をめぐる問題への分析的アプローチ」

(01月14日 応用倫理研究3 島蘭進 日本人と死生学)

02月04日 第10回 海老根理絵 「青年期前期を対象としたデスエデュケーションプログラムの
開発研究——スクールカウンセリング、学生相談による死生観の育成援助を目指して」

昨年度の発表:「高校でいかに生と死を語るか—教員に対するインタビュー調査を通じて」(山本佳世子)、「胃瘻という選択肢の意味」(会田童子)、「死別の悲しみとその彼方」(井藤美由紀)、「代理懐胎の問題—身体経験の忘却がひきおこすもの」(柳原良江)、「安楽死と沈静をめぐる」(竹之内裕文)、「選択的中絶をめぐる—日本の女性運動と障害者運動の“対立”を考える」(林千章)、「「遺伝子情報例外主義」パラダイムの揺らぎの中の遺伝医療—臨床遺伝専門医調査から見えてくるもの」(土屋敦)、「人工呼吸器の取り外しを巡るさまざまな状況を考える」(川口有美子)、「臨床現場と理論をつなぐ研究者—研究者の在り方を考える」(有田恵)、「—新聞記者の病と死—万朝報時代の堺利彦とその交友」(清水哲郎)、「日本人の死生観—調査結果報告」(中川恵一)